



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第26主日 C年(2022年9月25日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：アモス書 6章 1a、4—7節

第二朗読：テモテへの手紙一 6章 11—16節

福音朗読：ルカによる福音書 16章 19—31節

とうじしゃいしき やしな 当事者意識を養う

第一朗読の冒頭にある小さな言葉「災いだ」に注目してください。

プロテスタント教会が用いる【新改訳改訂第3版】の聖書の訳は次の通りです。

「ああ。シオンで安らかに住んでいる者、サマリヤの山に信頼している者、イスラエルの家が行って仕える国々の最高の首長たち。」

このように6章の冒頭にある「災いだ」は新改訳改訂第3版では「ああ」となっています。この単語は5章18節にも登場しています。そこでは「ああ。主の目を待ち望む者。主の日はあなたがたにとっていったい何になる。それはやみであって、光ではない。」(新改訳改訂第3版)とあるように、「ああ」は「災いの預言」が語り出されるとき「悲嘆」を表わす定型表現です。原語は「ホーイ」です。

イスラエル王国のヤロブアム二世の時代は平和と繁栄に満ちた時代でした。およそ40数年間続きました。おかげで人々に誤った安心感と自負を抱かせました。特にイスラエルの民の指導者たちは贅沢三昧と安逸をむさぼっており、迫っている災いには関心がありませんでした。悩むことも、心痛めることもしなかった盲目の指導者のおかげで、彼らに導かれる人々の惨めさが浮かび上がってきます。3節の「お前たちは災いの目を遠ざけるつもりで、暴力の支配を引き寄せている」(フランススコ会訳)は、安穩と生きる人々が、結果的に暴虐の時代の到来を早めさせているという厳しい指摘の言葉です。

第二朗読は『テモテへの手紙一』からですが、『テモテへの手紙一、二』、『テトスへの手紙』は

牧会書簡と呼ばれています。初代教会の形が整いつつある時代、教会の指導者への注意や勧告が述べられているからです。書かれたのは2世紀の初め頃だと考えられます。三つの書とも冒頭で「使徒パウロ」の名前があがっており、パウロによって書かれたようになっています。しかし、実際にはパウロの名を借りて誰か別な人が書いた手紙だと考えるのが一般的な理解です。

15-16節に注目してください。この節は旧約聖書の表現に基づく賛歌です。もともとはユダヤ教の会堂の中で唱えられていたのでしょう。それを初代教会が採用し、典礼の中で歌われたのだと考えられます。「王の王、主の主」は、神さまは最高の王であり、最高の主であるという意味です。「近寄り難い光の中に住まわれる方」に類似した表現は旧約聖書中によく見られます。「光」は神の栄光、善、権威を意味します。

今日の福音朗読の金持ちとラザロのたとえ話は、イエスさまの時代に広く知られていた説話を土台にしていると考えられています。27-31節のイエスさまによるオリジナルの箇所注目してください。たとえ話の後半部分はイエスさまの時代に広く知られていた説話にはありません。イエスさまによるオリジナルの部分です。金持ちは自分の五人の兄弟たちにラザロからよく聞かせてやってほしいとアブラハムに願います。しかし、断られました。なぜなら「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる」からです。つまり、彼らには聖書（ここでは旧約聖書）が与えられており、それに耳を傾けるだけで十分だからです。聖書、つまり神さまの言葉を認めない金持ちは、「たとえ死者の中から生き返る者があっても」、よみがえったラザロを見ても、悔い改めることはないからです。

今日の朗読箇所の直前には「律法の文字の一文がなくなるよりは、天地の消えさせる方が易しい」（17節）とあります。さらに15節には「人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われる」ともあります。金持ちとラザロのたとえ話の前半は、15節を説明するものではないでしょうか。そして、後半部分は17節を説明するものだと思います。そうしますと、イエスさまは人々に広く知られていた説話を言いながらも、律法の重要性を伝えようとなさったのだと思います。律法は神の言葉です。それに耳を貸さないなら、死者の復活という奇跡を目の当たりにしても、回心は生まれません。

説教：当事者意識を養う

「愛の反対は憎しみではない。愛の反対語は無関心だ」と語ったのはカルカタの聖テレサ(マザーテレサ)でした。今日の福音に登場する金持ちはラザロに無関心でした。もし、ラザロの人生に対して何らかの関心を示していたら、何かが変わったに違いありません。関心を寄せるとは、その人の人生に無関心ではないということです。それは、その人の人生の一端に触れるということでもあります。「自己責任」という言葉が横行して久しいですが、「自己責任」ですべては片付けられません。相手の人生に対して当事者意識を養うのは必要でしょう。